

博士学位論文審査要旨

2012年12月15日

論文題目： 形而上学のゆくえ—ヤスパースとハイデガー—

学位申請者： 堤 正史

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 長澤 邦彦

副査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫

副査： 文学研究科 教授 工藤 和男

要 旨：

本論文は、ヤスパースとハイデガーにおけるカント解釈およびニーチェ解釈の考察を通じて、両者の哲学的立場の異同を論じた上で、ヤスパースの「暗号解読」とハイデガーの「存在の家」としての言葉の問題を対比対決させ、将来の形而上学の新たな展望を切り拓こうとする野心的な労作である。両者の微妙な人間関係と思想的対決を追い、いずれの立場にも偏することなく、これを詳細に比較検討した上で、伝統的形而上学を超えようとした両者の哲学の内にある根本的特質を取りだし、形而上学の将来の可能性を示すという手法を通じて、見事にその課題を果たし先行研究にない独自の成果をあげている。

本論文は、第1部でヤスパースとハイデガーにおけるカント解釈を取り上げ、これを詳細綿密に考察している。筆者はカントの認識論を主客関係を前提とする超越論的合理論と解し、その上でヤスパースはカントのこの超越論的合理論を徹底的合理主義と解釈し、彼自身の方法として哲学していること、それに対してハイデガーは合理論の前提である主客関係そのものを問題とし、その根源を目指して哲学していることを指摘している。

第2部においてはヤスパースとハイデガーにおけるニーチェ解釈が取り上げられる。ニーチェは近代形而上学を徹底的に否定しているが、両者はそのニーチェもなおその形而上学の範囲内にあると見なしている。だがヤスパースはニーチェが我々をもはや語りえない理解不可能な者に対面させていること、ハイデガーは形而上学者ニーチェを克服することを説いていると結論する。

第3部ではヤスパースの超越者の「暗号」とハイデガーの「存在の家」としての言葉を対比研究し、存在をめぐる言語の問題を、存在と思惟という根本問題として捉え、ヤスパースにおける「統一への意志」としての理性およびハイデガーにおける「詩作の思索」として「言葉が語る」という事態を解明し、両者の対決と対話の中に「実存の生活実践」を通して「存在の言葉」を聞くという新たな形而上学の将来展望を見出している。

よって本論文は博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するに十分値するものと認められる。

学力確認結果の要旨

2012年12月15日

論文題目： 形而上学のゆくえーヤスパーズとハイデガーー
学位申請者： 堤 正史

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 長澤 邦彦
副 査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫
副 査： 文学研究科 教授 工藤 和男

要 旨：

上記審査委員3名は、学位申請者 堤正史氏に対し、2012年12月15日午後2時30分から3時間30分にわたり、同志社大学徳照館2階共同利用室において、提出論文をめぐり学力確認のための口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの試問に対し、提出論文の内容に関して適確明快に解答し、論文の意義とその独自性を明らかにした。また論文の背景となる哲学史上の質問および先行研究に対する質問にも適確に解答し、その専門関連分野の高度広範な知識を有することが証明された。

また語学試験（英語およびドイツ語）においても、学位申請者が研究上要求される外国語文献の読解能力を十分に有していることが確認された。

したがって、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認められる。

博士學位論文要旨

論文題目： 形而上学のゆくえ—ヤスパーズとハイデガー—
氏名： 堤 正史

要旨：

問題の所在

デカルト以来の近代の形而上学では、主体性が存在の原理であり、そこに人間中心主義の極みを認めることができる。こうした形而上学への批判は20世紀の哲学において頂点に達した。

しかし、形而上学が過去の遺物かといえば、必ずしもそうではない。既に多くの論者によって指摘されているように、形而上学はむしろ再評価されている。そもそも人がこの世にあって思考する限り、「なぜ」や「何」の問いをやめることはできない。もし、そうした問いとこれに答えようとする営みをやめれば、世界は訳の分からない抵抗・脅威にとどまり、安定した「生」を確保することはできない。そしてこうした営みを徹底すれば形而上学に至りつかざるを得ない。

伝統的な形而上学に留まることはできないが、「根拠」や「本質」を問う限り形而上学をナイーブに放棄するわけにもいかない。形而上学はどこへ向かうのか、形而上学のゆくえは？これは今日における「哲学の使命」を考える上で喫緊の問いでもあろう。

ヤスパーズとハイデガーへの注目

ところで、こうした今日的な議論を稔りあるものにするためには、主体性の形而上学の帰趨をめぐる問題が明確化されてくる20世紀初頭に立ち返ることが必要であり、有効でもあろう。そうしたとき注目すべき哲学者として、ヤスパーズとハイデガーの名前を挙げることができる。ニーチェやキルケゴールを再発見、再評価した両者は、形而上学の行き詰まりを熟知する一方、人間には形而上学への抜きがたい生来の傾向があることを認め、形而上学的な問題を単純に拒否することはできないとしている。

しかし、互いを同志と認め合うほどの親密な関係が長く続かなかったことから分かるように、「主体性の形而上学」に対してとった二人の方向は大きく異なっていく。

形而上学に関するハイデガーの最終的な態度は、比較的はっきりしていると言えよう。彼の思索の要点は、形而上学を「解体」「克服」し、そこから「退歩」することによって、形而上学が由来する根源の近くにある点にある。

これに対してヤスパーズの場合、形而上学からの退歩というのではなく、これを彼なりの仕方で徹底し、形而上学をその「挫折」にまでもっていき、それによって新たな道を切り開こうとしている。

そこで、以下において私は、共通の問題に面しながら、ヤスパーズとハイデガーの二人が相異なる道を進んでいったという事柄に少し立ち入り、従来の形而上学の何が批判され、彼らが形而上学をどこへ導こうとしたのか「形而上学のゆくえ」について若干の考察を加えてみたいと思う。

本論文の進め方

学問形成のキャリアも異なり、難解な多くの著作や講義録を残した二人をどのように比較し、当面の問題に答えたいけばよいのか、戸惑うところだが、それなりの方針をまず定めておく必要がある。

形而上学の歴史的展開を考えたとき、カントとニーチェが極めて重要であることは言うまでもない。理性の権能を批判するカントを形而上学の「分水嶺」とするならば、伝統的形而上学を痛罵

しつつ、なおそうした形而上学に繫縛されていたニーチェは形而上学の「岐路」に立っていたと言えるだろう。ヤスパーズとハイデガーの炯眼は、当然、こうした「分水嶺」「岐路」としてのカントとニーチェに向けられた。

ここで一つの見通しを得ることができると思う。すなわち、ヤスパーズとハイデガーが、カントとニーチェをどのように捉え理解していたかを審らかにすることで、二人が伝統的形而上学にいかにか臨み、形而上学の向こうをどのように望見していたかを明らかにできるのではないか。それによって、形而上学をめぐる二人の重なりと差異を押さえることができるのではないか。そこでこうした見通しのもと、まず、カントとニーチェを主題的に論じた著作を中心に、その周辺にも適宜配慮しながら、二人のカント及びニーチェ解釈を比較検討したい。こうした手続きを踏んだ上で、次に私は二人の最終的な立場とも言うべき「暗号」と「存在の言葉」を取り上げ、比較検討し、両者の形而上学をめぐる思索の核心に迫る。こうした一連の考察を通して「形而上学のゆくえ」に関して何らかの示唆が得られると確信する。

本論文の構成

序論

二人の著作に即した議論に入る前に、『ハイデガーへの覚え書き』を手引きにして、彼らがお互いをどのように見ていたかを確認しておきたい（第1章）。そこで浮かび上がってくるのは、二人の学問観、哲学観の相違である。

第1部 ヤスパーズとハイデガーにおけるカント

ここではカントの認識論を「主観－客観－関係」を前提とする超越論的合理論とした上で、この合理論をヤスパーズとハイデガーがどのように捉えていたかを示し、比較検討する（第3章、第4章）。そうした考察を通して、ヤスパーズでは、カントの合理主義が徹底的合理主義と解釈され、それがそのまま彼自身の哲学の方法となっていること、これに対してハイデガーでは合理論の前提としての「主観－客観－関係」そのものが問題視され、そうした関係が生起する「根源」にまで問い進んで、カント「以上」が目指されていることなどが明らかになる。

しかし、上の考察に先立って、私はヤスパーズの学問観・哲学観と、ハイデルベルク大学の同僚でありながら互いに激しく敵視し合った新カント派の泰斗リッカートのそれとを対比しようと思う（第2章）。二人の学問観・哲学観は極めて対蹠的だけにヤスパーズのカント解釈を理解する上でも示唆深い。

第2部 ヤスパーズとハイデガーにおけるニーチェ

ニーチェは近代形而上学を痛罵するが、ヤスパーズもハイデガーもニーチェ哲学がなおそうした形而上学の埒内にあると見なしている。だが、二人の解釈は当然多くの点で異なっている。

まず、ヤスパーズのニーチェ解釈について述べる（第5章）。ヤスパーズは、そのニーチェ解釈を通して、伝統的形而上学のように超越者について語るのではなく、もはや語れない「理解不可能なもの」に我々を面座させ、主体性はその自己同一性を維持できない地点に立たせることこそ、今日における形而上学の使命と見ている。

次に、私はハイデガーのニーチェ解釈を取り上げる（第6章）。ハイデガーによれば、形而上学者としてのニーチェもまた克服されねばならない。しかし、ニーチェの克服というとき、そこには単にネガティブではなくポジティブな意味（存在の外留）もある。

ヤスパーズとハイデガーのニーチェ解釈の要諦を押さえた上で、私は両者の解釈の「近しさ」にも目をやりながら、根本的な相違点を明らかにする。そうした相違点は、詰まるところ「主観－客観－関係」を枠組みとする「思惟」をどう見るかによる。ヤスパーズはあくまでもこうした枠組みの中に留まろうとする。これに対して、ハイデガーはこの枠組みに収まらない「対抗的思惟」を提示している。それは主観ではなく「存在」を主語とする思惟である。だが、思惟はどこまでも人間の思惟であるからヤスパーズのように主客関係的思惟に留まりその挫折を率直に認

めることこそ、思惟をめぐる謙虚さと矜持を保てるとも解される。

第3部 超越者の「暗号」と「存在の家」としての「言葉」

「形而上学のゆくえ」について考えるとき、最終的に取り組むべき問題の一つは、二人が存在をどのように語っているか、換言すれば存在をめぐる言語の問題、すなわちヤスパースにおける「超越者」の「暗号」とハイデガーにおける「存在の家」としての「言葉」の問題であろう。

いま示した問題は、形而上学の根本問題である「存在」と「思惟」、あるいは「存在」と「理性」との一致をめぐる問題にもつながる。そこで、まずヤスパースがこうした一連の問題をどのように考えていたかを考察する（第7章）。そうした考察を通して、「統一への意志」を本質とする「理性」こそヤスパース哲学を終始一貫していることが明らかになるだろう。

次に、私はハイデガーにおける「存在の言語」と「思惟」について考察の歩みを進めることになるが、その前にヤスパースとブルトマンとの、よく知られた非神話化論争について述べておく（第8章）。この論争を通して、ヤスパースにおいて超越者の暗号を「読み解く」とはどういうことかが浮き彫りにされる、と考えるからである。

最後に、ハイデガーにおいて「存在の言葉」と「思惟」の問題がどのように考究されたかを論じ、ヤスパースの暗号形而上学と比較検討する（第9章）。

表象的思考によって進められる形而上学は、存在者の存在の探求であって主客の枠に収まらない存在そのものを射ることはできない、これがハイデガーの形而上学批判の前提である。そこで彼はこうした思惟とは「別の思惟」の可能性を探る。それが「詩作の思索」として結晶する。彼は詩作の現象学的解釈によって、「言葉が語る」といった事態を顕わにしようとする。そうした努力をヤスパースに認めることはできない。ヤスパースは主観客観の枠組みにあまりに忠実であった。

こう見れば「ポスト形而上学の思惟」として、ハイデガーに一日の長を認めるべきか。だが、必ずしもそうとは言えない。「存在」そのもののあらわれにその思索を焦点化し集中させるハイデガーにおいては、ヤスパースが試みたような、「存在の言語」を聴く人間の「あり方」「生き方」、すなわち「実存の生活実践」に関する考察が疎かにされている。

ヤスパースはハイデガーの内に自らの「敵対者」を見た。だが、この両者の対決の内にこそ、われわれは新たな形而上学の将来展望を見いだすことができるのではないだろうか。すなわち、「実存の生活実践」を通して、自らの限界を意識し、超越者に面する態勢が整えられてこそ、「存在の言葉」が届く、という展望である。こうして両者の対決と対話を通して新しい形而上学のゆくえが望見できる。

(3,988 文字)